

国指定 有形文化財 建造物

ひづちしょうがっこう

日土小学校 附指定・設計図面42枚

所在地：八幡浜市日土町2-851

所有者：八幡浜市

指定年月日：2012（平成24）年12月28日

解説：

日土小学校は、合理的な構造と計画、工業製品と身近な材料を用いて、優れた意匠により豊かな空間を作り出した、木造モダニズム建築の傑作として知られる。設計者は、八幡浜市土木課建築係であった建築家・松村正恒（1913～1993）で、在職中の1950年代を中心に多くの優れた公共建築を手がけた。

中校舎は1956（昭和31）年竣工、建築面積375.80㎡、東校舎は1958（同33）年竣工、394.53㎡、いずれも木造2階建、屋根はスレート葺一部鉄板葺で、喜木川に迫り出した鉄骨階段やテラスを附属する。耐震化に伴い2008（平成20）年保存再生工事に着手、09（同21）年に完了。2012（平成24）年、戦後木造建築として初めて国重要文化財に指定されている。

躯体は木造に鉄骨を組み合わせ、壁面に頼らず柱を主体として建物を支えている。東校舎2階の喜木川に迫り出したベランダは、大きな庇を斜柱で支え、内部は独特の和風の意匠をもつ図書室とし、その1階部分は柱のみで上階を支えるピロティとなっており、機能、意匠、構造において日土小学校を象徴する空間である。見通しの良い昇降口、光と風を導く中庭、広く緩やかな階段、廊下から房状に連なる東校舎のクラスター型教室配置など自由な平面構成が展開され、木の建具枠を柱の外から取り付けてガラス建具を入れることで、外壁は柱の干渉の少ない、水平に連続した大きな窓となり、中校舎1階廊下の高窓など、必要に応じて窓を設ける自由な立面構成がみられる。

西欧では鉄やコンクリート、ガラスなどの普及により従来の制約から解放された建築が、新しいあり方を求める中、1927（昭和2）年、モダニズム建築の巨匠ル・コルヴュジェが「新しい建築の五つの要点」として「ピロティ」「屋上庭園」「自由な平面」「水平連続窓」「自由な立面」を提唱した。

日土小学校は、その約30年後、日本独特の木造建築の特質を活かしてそれらの要点を実現し、戦後の新しい教育の場に求める機能を具体化した、貴重な木造モダニズム建築といえよう。

（「八幡浜の文化財」編集委員会編 2015『八幡浜の文化財』八幡浜市教育委員会 より引用、一部改・加筆）

